

5 お雇い外国人（2）富岡製糸場・ポール・ブリュナ

日本では古代から養蚕が行われていましたが、質の良い絹を生産することができなかつたため、中国からの輸入に頼っていました。そこで、江戸（1603 - 1867）幕府は養蚕と絹織物の生産に力を入れ、全国各地で良質な生糸が生産されるようになり、生糸は1860年頃の開国直後の日本の主要な輸出品になりました。



Paul BRUNAT

一方、ヨーロッパでは19世紀後半に蚕の伝染病が発生し、フランスの養蚕業は大打撃を受けました。横浜にいたフランスの商人から、日本の蚕が病気に強く、上質な生糸が生産されているとの情報がもたらされたことから、ヨーロッパへの日本の生糸の輸出が急増しました。しかし、過大な需要によって粗悪な生糸が流通したために、日本の生糸の評価が下がってしまいました。そこで、明治（1868-1912）政府は、質の高い生糸を輸出するために、官営の製糸工場を建設することにしました。この時、横浜で生糸の検査人をしていたポール・ブリュナ（1840-1908）が、外国人顧問として迎えられました。

ブリュナと明治政府の役人による調査の結果、養蚕業が盛んであること、水や燃料となる石炭が豊富にあるといった理由から、現在の群馬県富岡市に工場が建設されることになりました。そして、1872年に日本で最初の西洋式の製糸工場である富岡製糸場が完成しました。ブリュナは、製糸場に必要の技術者をフランスから招き、日本人の体格に合うように改良した機器を取り寄せました。繰糸所（繭から糸を取り出す作業をするための建物）では、全国から集まった工女が働き、本格的な器械による製糸が行われました。ここで生産された生糸は質が高かったとして、海外で高く評価されました。

2014年、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が、世界遺産に登録されました。2015年には、富岡市とブリュナが生まれたブル・ド・ページュ（Bourg-de-Péage）市が姉妹都市となり、新たな交流が生まれました。

掲載日：2021年5月20日